

# 「Liver Transplantation」

edited by R. Y. Calne

The Cambridge-King's College Hospital Experience

旭川医科大学第2外科教授

水戸 勉 郎

1960年代は、臓器の入れ替え、すなわち腎臓、肝臓、膵臓などの移植が臨床に適用されだした、医療にとっては画期的な年代であった。しかし、臓器の機能不全に対する根治的治療法として確立し、普及したものは腎移植のみであり、肝臓移植は1963年3月既にコロラド大学のDr. Starzlによって最初の臨床が行われたにもかかわらず、今日まで限られた施設で臨床実験が積み重ねられているにすぎなかった。限られた肝臓移植の臨床家のためまざる研究成果は、手技上の改良とサイクロスポリンAなどの新しい免疫抑制剤の導入へとつながり、1980年以降は肝臓移植の症例も急速に増加し、昨年の6月の4施設の集計によると540例に達し、また1年生存率も60%を超えるに及んだ。

このように、肝臓移植を“治療”のレベルにすることに貢献した専門家は、米国の雄、Starzl教授であり、他方は欧州の雄である本書の編集者Calne教授であろう。

Starzl教授が1969年に、自験例25例の経験と動物実験の成果を

まとめた「Experience in Hepatic Transplantation」なる単行本は今日まで、雑誌の文献以外では肝移植を志すものの唯一の成書であった。その後15年を経て、Calne教授がThe Cambridge-King's College Hospitalの125例の経験と、臨床のフィードバックシステムの役を果たした動物実験の成果を簡潔にして要を得た本として上梓された。肝移植の実験研究者の一人として本書を手にしたとき、やっと世界の両雄の本が出揃ったと安堵感にも似た形容しがたい喜びを感じ、むさぼるように目を通した。Part IからPart VIまでの行間からは、約20年間に及ぶ肝移植との闘争と苦悩を経験し、これを克服した勝利の歌声が聞こえるような感慨を覚えた。

Part Iは、肝移植の臨床を支えた実験的背景で、動物の肝移植手技から、肝移植の拒絶反応に対する特異性を論じ、臓器移植の飛躍的進歩に貢献しているサイクロスポリンAの初の臨床応用に至る過程が書かれている。Part II～IVにかけては、術前、術中、術後管理の実際に関し、

豊富な臨床経験を有する者のみが記述できる具体的な内容が盛りされている。特に、術中、術後管理のコツは、動物実験で手技に熟達している本邦の研究者がヒトに適応するに際し、脳裏にきざみ込んでおかなければならないことであろう。また昨今は、肝移植研究会や心臓移植研究会が発足し、日本で脳死の概念が受け入れられたら、明日にでも肝や心臓移植の臨床が行われようとする気運にあるが、Part IIの術前管理の章で、適応患者の精神医学的評価の重要性や、適応患者の条件の項に書かれているように医師を含めた医療スタッフと患者の相互の信頼関係の確立こそが、肝移植を行う際の前提条件であるとする文は銘記しなければならない。

Part Vは肝移植の病理を、VIでは自験例の成績と共に他のセンターの成績も集計し記載しているが、付録の125例のData Summaryに目を移すと、Calne教授の苦闘の歴史と、そこから得られ、記された本書の重みを感じずにはいられない。

いずれにせよ、本書は単に肝移植を志す外科医のみならず、肝疾患の臨床に携わる内科医の方々にもぜひ一読を薦めたい。内科と外科の信頼関係があってこそ本邦でも肝臓移植が“治療”として確立するからである。

399 pp, 1983, ¥18,000

Grune & Stratton, London

取り扱い 医学書院洋書部